

書 評

坂本優一郎著『投資社会の勃興
——財政金融革命の波及とイギリス』
(名古屋大学出版会、2015)

高田 実



産業革命の祖国イギリスは、金融国家として生き延びている。この金融国家を支える社会の歴史的な性格を、どのように理解したらよいだろうか。ここで取り上げる書物は、これを端的に「投資社会」と表現する。それは、「証券を売買し、保有し、利子や配当を得る行為が存在する社会」(9頁)と定義されるが、単なる投資利得社会ではなく、時代の枠組みをも規定する「全体性」をもった社会という意味で用いられている。したがって、この社会の勃興こそが、「近代社会の形成にとって欠くことができない前提」(9頁)となる。本書は、18世紀後半の投資社会の勃興を、政治、社会、文化、経済の4つの面から考察することで、その歴史的意義を総体的に把握し、新しい歴史像を提示する。

「序章 『投資社会』論へ向けて」では、イギリス近代史研究において「投資社会」論がいかに重要か、問題提起される。「イングランド財政金融革命」論、「財政＝軍事国家」論、アン・マーフィの議論などの研究史が整理され、時間(18世紀後半)、空間(政治的境界の問い直し)、対象(公債と他の証券の関係)の論点が見え、本書全体の課題と構成が提示される。とくに、国家と投資社会の弁証法的関係に注意が喚起される。

「第I部 投資社会の政治経済学」は、投資社会の土台をなす公信用の生成を政治面から考察する。「第1章 国政・都市政治・国際金融——18世紀中頃のロンドン・シティと公債請負人」では、1757年債の事例研究を通して、限定請負制度による起債の枠組みが確立する過程が示される。公信用の生成は、章題に示される三要素、つまり宮廷派ウィッグ、シティの反宮廷派、コスモポリタンな公債請負人が織り成す関係のもとではじめて

理解されうる。政治のなかで公債制度は動き出すのだ。限定請負制度が定着し、七年戦争期の財政を支えると同時に、公債請負人と中央政界が結びついた「古き腐敗」を批判する急進主義の台頭を示すのが、「第2章 七年戦争・公債請負人・党派抗争」である。公債請負人の国内外にまたがる人脈が辿られ、誰が起債に応じたか詳らかにされる。驚嘆するほど詳細な分析の結果、英国公債を支える国際的ネットワークが明らかにされ、政治的境界を超えて「オランダ、イギリス、フランスが同一の投資社会という空間を共有したこと、また、共有していると当時の人びとが認識していたこと」(85頁)が示される。

「第Ⅱ部 投資社会の形成」では、国際的広がりをもって「公信用を消費する側、つまり証券を取引し、保有し、利用する投資社会の社会的な側面」(115頁)が分析される。「第3章 公債請負人の基層——オランダ人貿易商と近世最末期の投資社会の一断面」では、投資社会の最上層、ファン・ネック商会の活動が検討される。貿易と金融を融合した経済活動に従事するユグノー商家は、投資社会のなかでは文化的閉鎖性を超えて開かれた投資活動を展開する。「第4章 証券投資をする人びとの社会——投資社会の垂直的拡大と公債の社会化」では、証券の投資者、流通経路、投資目的の分析を通じて、中流層、労働者層、女性の証券保有の実態が示される。公債請負人だけでなく、証券ブローカー、新聞広告、遺贈などを通じて証券保有が普及し、所得確保のみならず、投資収益をも狙った投資社会拡大の実態が描かれる。「公債の社会化」が進行する。驚愕すべき精度で証券所有の実態が明らかにされる。

「第Ⅲ部 文化と投資社会」は、投資社会の文化的側面、つまり「主観的な認識基軸の生成と、客観的な科学的な学知の誕生」が論じられる。「第5章 投資の文化史——公信用・投機・投資」は、過熱する投資社会のなかで、「土地」対「貨幣」という二項対立的認識から、次第に「土地」「商業」「証券」の三分法へと認識の構図が変わるとともに、「投機」と「投資」を峻別しつつ投資を促進する議論が登場する様を描く。後者では、トマス・モーティマ『ブローカー入門』(1761年)は非エリートに、またイサーク・ド・ピント『循環・信用論』(1771年)は海外のエリートに、投資を促す。著者はこれらの書物の受容のされ方にまで行き届いた配慮をしている。さらに

証券が年金という形で普及されたことが、投資社会の垂直的拡大につながった。「第6章 年金・科学・投資社会」では、これに伴い複利計算、人口統計学、確率論などの科学が発展し、それがさらなる投資の拡大を招くという投資と科学の「共棲関係」が示される。とりわけ各地に民間トンチンが成立し、これが後の公信用の垂直的および水平的拡大と大きく関係していることが強調される。

「第Ⅳ部 投資社会の拡大と経済」は、投資社会の経済的側面を検討する。「第7章 もうひとつの財政金融革命——社会基盤整備と投資社会」は、18世紀後半から19世紀初頭にかけての、都市改良、道路建設、港湾改良などの社会基盤の整備と投資社会がいかに密接に関係していたかを描出する。中央政府、地方政府、改良委員会、信託委員会などの事業主体は、税と各種利用料収入を利払い原資とした債券発行、株式発行によって資金調達を行った。この仕組みに信頼を与えていたのは議会制定法であった。「第8章 投資社会空間の拡大——アイルランド・ロンドン・ジュネーブ」では、1770年代のアイルランド財政はトンチンによって維持されたが、そこに資金を提供したのは、ロンドンを結節点としたヨーロッパ規模の投資社会であったことが示される。財政革命は、より広く投資社会のなかに位置づけられなければならないと主張される。「第9章 投資社会と国際金融」は、投資社会の水平的広がりを、債券市場における公債の発行、引き受けの数量的把握に基づき具体的に検証する。とりわけ、公債引受人の人的ネットワークを媒介とした、アムステルダム市場とロンドン市場との連携が証明される。市場・投資社会・国家の関連の重要性が指摘される。

「終章 投資社会とは何か」では、これまでの分析を踏まえて、投資社会の全体像が示される。戦争のための財源確保を起点として整備される公債制度に対応して、公債請負人を媒介としつつ水平的、垂直的に拡大しつづけた投資社会とは、政治、社会、文化、経済の4局面が組み合わさった「人びとが自発的にモネタリな関係で結合された社会」(384頁)であり、それが「動的な秩序を基調とする近代への移行を支えた」(385頁)ことが強調される。投資社会の全体性は、図終—1(381頁)に見事に図示されている。

さて、本書の意義はどこにあるか。何よりも、本書は投資社会を「全体社会」と捉えることで、画期的な近世・近代社会論を骨太に提示している。

これまでも、公債や財政制度の整備の意義を論じた研究はあったが、本書はそうした制度を成り立たせている社会の側に身を寄せながら、研究の手薄であった18世紀後半を対象にして、新しい視点から政治、経済、社会、文化を融合し、国家論もそのなかに埋め込んだ独自の全体史を描いている。社会とは、本来そうした全体構造を指し示す言葉であったし、社会史も本来であれば新たな全体史でなければならなかった。単に投資行動の事例の寄せ集めだけであれば、本書の魅力は半減していたであろうが、著者一流の構成力が、他の追隨を許さないオリジナリティの高い「全体社会」の構築を可能としている。〈政治→社会→文化→経済〉という全体構成の論理の序列には、異論もありうるだろうが、投資社会の歴史実態を表示するためには、この方法がベストであるという対象に即した著者なりの判断がある。それは、歴史の方法としては十分に成り立ちうる。この方法論も含め、何よりも「全体社会」としての投資社会という本書の肝をめぐって、議論が展開されるべきである。

著者が、魅力的な投資社会論を描きえたのは、なぜか。一方では、投資社会に身をおく「人びと」とその結びつきに、他方ではカネの流れに、いずれも徹底してこだわり、投資の実態を驚くべき精度で数量的に明らかにしているからである。誰が、何の目的で、どれくらいの金額を、どのように投資し、公債引受人はいかなる人脈を用いて資金を集めているのか。制度と結果の積み木細工に満足せず、人の動きに即して論を再構成しようとするこだわりが、投資社会の垂直的、水平的拡大の実像を見事に浮かび上がらせる。公債請負人の国境を越えた人的結合の解明はもちろんのこと、トンチンと女性投資家の持つ意味を説得的に議論している点は画期的である。中下層の人びとが、いかに生きようとしていたかという視点から、投資を見直すことで、投資社会に巻き込まれる大衆の姿がよくわかるのだ。個人的には、トンチンがここまでの広がりをもっていたことは驚きであった。とても勉強になった。また、各章にさりげなく配置されている図表は貴重な成果であるが、その背後には一次資料を探り当て、妥協せずに細かな数字を積み上げていく膨大な努力の跡が隠されている。この成果は今後の研究にとっても大変有益であるし、著者の忍耐強い調査にただただ敬意を表したい。

最後に1点だけ、論点を提示しておきたい。きわめて魅力的な投資社会論であるが、そこに内在する矛盾、対立、葛藤をどう組み込むかという点ではさらに研究の余地があるだろう。たとえば、当時は産業革命期でもあるが、モノづくりへの投資をどのように組み込むか。産業投資と公債・海外投資の乖離は、19世紀イギリス金融史の特徴であるが、18世紀の投資社会でこの両者はどのような関係にあったのか。限られた資金をめぐって競争はなかったのか。人とカネをめぐる説得的な議論を展開する投資社会論だけに、もうひとつの要素モノをめぐる社会の動きをどのように組み込むだろうか。鍵となるのは、産業と金融を媒介する「商業」がもつ社会的機能のような気がする。マーチャント・バンキングの勃興とも合わせて、投資社会の全体性を豊富化する視点から、このことを著者に尋ねてみたい。

膨大な研究史があり、近年最も活発な議論がなされている時代をめぐって新しい歴史像を提示することには大きな困難が伴うが、徹底した調査を基盤にそれに立ち向かい、今日的な関心にも応える魅力的な歴史像を提示する本書は、名著の名にふさわしい1冊である。必読の書である。

——甲南大学教授